

スポーツを通して生活の質を高めたい



青年海外協力隊事務局
海外業務第二課

小原 裕子
O'HARA Yuko

大学卒業後、公立中学校教諭を経て青年海外協力隊に参加。帰国後、イギリスの大学院で開発学(教育)を学ぶ。帰国後、青年海外協力協会を経て、昨年9月より現職。

種目別のスポーツから衛生、環境問題、交通安全まで、実は思いのほか幅広い分野を網羅しているのが日本の保健体育という教科だ。体育やスポーツを通して、生活の質の向上を後押ししようと奮闘しているのが、小原裕子さんだ。

保健体育は日本特有の教科 本質は「生きること」の学び

私は大学を出てから、中学校教諭として保健体育を教えていました。体を動かし、健康を維持することから、環境問題、交通安全など、生きることに関する知恵を総合的に学ぶ保健体育は日本にしかない科目です。教師として生徒たちに接する中で、「いろんなことを教えているけれど、自分で直接見聞きし、経験したものはどれくらいあるのだろう」と考えたことが、私が世界に目を向けるきっかけとなりました。

そこで青年海外協力隊に参加し、カリブ海の小さな島国セントビンセント及びグレナディーン諸島(以下、セントビンセント)に派遣されて、2カ所のセカンダリースクールで体育を教えました。

カリブ海諸国にはよくできた統一の学校カリキュラムがあるのですが、中身が現場まで浸透していないのが課題です。私が配属された学校の一つは教員も生徒も優秀だったので、カリキュラムの中身を具体的に教える教科手法のアドバイスが中心でした。一方、もう一つの学校は学校崩壊が起きているような状況。生徒・教員の双方に働き掛け、授業を成立させるところから始めなければなりませんでした。

そんなある日、生徒が先生に罰としてむちで打たれるのを目撃し、衝撃を受けまし

た。「生徒が自分に逆らった」と思い込んだ教師によって、生徒がむちで打たれる国があるという事実を悲しく感じるとともに、開発途上国と先進国、両方の現場を見た自分だからこそ、できることがあるのではと思うようになりました。

スポーツが与えてくれる価値 笑顔を目撃につなげる

東京オリンピックが決まったのは、一度日本に戻った後、イギリスの大学院で開発のための教育社会学を学んでいたときでした。オリンピックに向けて、安倍総理が公約として掲げた「スポーツ・フォー・トゥモロー」というプロジェクトが立ち上がり、帰国した私は、途上国で運動会を開くプロジェクトを担当することになりました。開催地はアフリカの馬拉ウイ。現地の学校で教える現役協力隊員と一緒に、体育が定着していない村の小学校で、なんとか運動会を実現することができました。

運動会をやってみて再確認したのは、スポーツは言語を超えたコミュニケーションだということ。子どもたちは英語が分からず、私は現地のチェワ語が分かりませんでした。すぐに覚えてくれました。また、現地の先生たちも、子どもへの思いはとても強く、授業の質を高めようとはがんばってくれました。こうした先生たちを後押しし、より良



馬拉ウイの運動会の練習。現地の学校の先生たちはもちろん、地元の人たちからも応援された

い教育に向けた支援をできるのが、この仕事の最大の魅力です。

現在、私は体育・スポーツに関するボランティア支援の取りまとめやボランティア派遣の手続き、関係機関との調整などを担当しています。スポーツだけでは衣食住を満たすことはできませんが、他の手段と組み合わせれば、人の生活の質が高まり、より良い人材が育ちます。2020年以降もスポーツを通じた協力の意義を深め、スポーツの価値を多くの人に知ってもらえるように、これからもがんばりたいと思います。



セントビンセントの教え子たちと。日本の中学～高校生の年齢に相当する子どもたちに体育を教えた